

II 「世界像」の時代から「真理像」の時代へ

ハイデッガーの「技術」論と仏教の「業」思想

論考

大橋良介

Ryosuke Ohashi

はじめに

ほぼ九〇年前の一九三八年に草されたハイデッガーの論考「世界像の時代」^{※1}は、加速度的に進展しつつある「現代技術」の時代になっても、技術の本質を洞察する思索として、なお際立っている。その洞察の射程を簡単に言えば、「近世科学としての学を基礎づける形而上学的根拠」(20)。引用のページ数については注1を参照)の考察である。哲学の分野でも技術を考察する論者たちは相当数にのぼるが、それらを含めても、現代技術を「西洋形而上学」の本質に鑑みて捉えるというような考察は類例を見ない。

もちろんその場合、一九三八年という時点での、今日からみ

れば古典的な技術の水準が彼の考察の前提となっていることを嘆う批評家もいる。しかしハイデッガーは量子力学のハイゼンベルクとも親密な交わりをもち、単に現代技術を知らない哲学者の思弁といったものではない。彼が一九五〇年代に発表した技術論は原子力をも含めた今日の科学技術に表明的に言及しているが、それは一九三八年の論考でも本質的に同じである。もし彼の考察で問題化したい部分があり得るのであれば、それは現代技術の個々の分野への言及ではなくて、その根本本質に関わるものでなければならぬ。ハイデッガーは近世／近代の技術の進展において、「量的なものから質的なものへ」(28)という根本動向を捉えた。そうであれば九〇年後の現在、もしその根本動向そのものに関して「質的変容」があったのであれば、それはハイデッガーの本意にも沿う方向での検討テーマとなり

得る。

結論を先取りするなら、ハイデッガーが視座に収めた現代技術の根本構図は、特に今世紀に入ってからその内部が流動化し、仮想性を帯び、虚無化の度合いを深めているように見える。その動向の先に、西洋形而上学の視座では届かない「非・形而上学」あるいは「形而上学以前」ともいうべき領域が垣間見えてくる。すでにハイデッガー自身が、「世界像」を覆う巨大なもの「影／陰」(Schatten)に言及し、その正体を、「今日の我々には知ることが拒まれているもの」(88)という、やや保留気味のニュアンスで表現し、「無」(104)と表現した。「無」は形而上学の歴史の中にたびたび浮上する「非・形而上学」あるいは「形而上学以前」の事柄である。その事柄を、現代技術において顕著になりゆく仮想性と虚無性の動向に着目して——結論を先取りするな——仏教の「業」(ごう、カルマ)に近い事態と想定して捉えるなら、ハイデッガーと共に、しかしハイデッガーとは別の視座を開くという方向も、開け得るように思われる。

その場合——ふたたび論点を先取するなら——「業の因果」といった、ともすれば神話のあるいは迷信的な概念ととられやすい観念と、数学的な精密性(Exakt) (73)に裏づけられる客観的・物理的な「原因・結果」の観念とは、どこまでも区別されなければならない。「業」の思想を説く『華嚴経』や『涅槃経』は、深い直観内容を含むとはいえ、現実の歴史世界の形

成動力に結びつく方向は提示してこなかった。仏教思想は基本的には仏陀の智慧を説く上からの「教」であり、事象に即して下から問い進む「学」ではない。しかし他方で、科学技術の思考や実証的研究の視座も万能ではない。それは人間の生死の問題や実存の智慧といった事柄にまったく関知しないからである。同じ人間の生および世界にかかわる二つの方向であるなら、両者はどこかで切り結ぶものでなければならぬ。愚考では、西洋形而上学と仏教思想の切点のひとつを「業」の思想という視座で捉えることができるように思われる。本稿では「業」の考えは仏教的伝統の枠から外されてかなり自由に、多義的に使われるが、それによって、ハイデッガーからの「遠さ」の方向にありながら逆にハイデッガーへの「近さ」を開く視座が現代技術をめくって与えられるようにも思われる。

一 ハイデッガーの「世界像の時代」の要点

ハイデッガーは「近代」(この原語は *Nezeit* だから、日本語では「近世」と「近代」の両方が該当する)の本質現象として、五つの事象を挙げる。①科学、②機械技術、③美学、④文化、⑤奪神化(Entgötterung)。このうち最後の「奪神化」は、神とか神々とかについて決定し難くなったという、「ニヒリズム」と通ずる重たい近代の本質現象のことであるが、論考「世界像の時代」の中心主題の位置ではなく、言及にとどまっている。

この論考で軸となるのは、①の「科学」と②の「機械技術」である。まずこれについてのハイデッガーの考察の要点を、取り出しておこう。ハイデッガーの叙述は科学の手續きと方法についての精緻な観察を含むから、粗雑な要約は豊かな肉付けを削ぎ落とすことになるが、あえて拙稿の着手点の形成のために、彼の論述の骨格だけを浮き彫りにしてみよう。

科学と呼ばれる今日の学 (Wissenschaft) は、従来の学知 (エピステメ) とちがって、「研究」(Forschung) (79) という形をとると、ハイデッガーは言う。それは数学的な「精密性」(Exaktheit) (79) を旨とし、「手續き」(Verfahren) (79) が事実把握に先行し、「実験」(Experiment) (74) を伴う、「営為」(Betrieb) の性格を帯び (84)、「研究所体制」(Institut) (85) のもとで推進される。ハイデッガーが述べる「研究者」の状況、すなわちいつも多忙で、会議を重ね、学会で知識を得、出版社と結びつき、云々という状況は (85)、ほぼ九〇年後の今日の大学や研究所でさらに逼迫し、とりわけ自然科学と工学の体制を基準尺度とした学術行政の価値観を、人文科学に強いられる現代の (少なくとも日本の) 学問状況に、あまりにも正確に妥當し、苦笑いさせられる。

ハイデッガーは、この五つの現象を徴候とする近世／近代において、人間が有るもの (Seiendes) を表象定立し (Vorstellen) 制作定立する (Herstellen) 主体 (Subjekt) という在り方となり、有るものの基体 (Subjektum) となり (86)、有るもの全体がこ

の主体にして基体を関係軸とする「世界像」(Weltbild) になった、という事態を指摘する。

彼の言う「世界像」とは、世界についての像という意味ではなくて、世界が「像」になった、という意味である。ハイデッガーがこの語で意味する事態は、ドイツ語で言う、*Wir sind über etwas im Bilde* (「われわれは、或るものについて、その像を思い浮かべて把握している」という表現で、よくあらわされていると言う)。(89) ハイデッガーの語に蛇足を加えるなら、「像」(Bild) という語には「形成する」(bilden) という動詞や、「形成」(Bildung)、「教養形成」(Ausbildung)、「原像」(Urbild)、「模範像」(Vorbild)、「空想」(Erfindung) といった名詞が連関し、それは日本語の「像」で訳しきれない。そのことは英語やフランス語でも同様である。ハイデッガー自身においては、この語は「表象定立する制作定立」(das vorstellende Herstellen) の全体形像 (Gesamt) (94) だとされる。ここでは特に「定立」(Setzen) の語が、前面に出てくる。この語の連関も日本語に訳しきれない。

哲学テキストにおけるこういった「訳語」の問題は、大抵は翻訳語と原語との一対一対応を素朴に前提する仕方では飛び越えて特に問題はなく、大抵はそれで「研究論文」が成立するのであるが、目下のテーマのように表面の文章脈絡だけでなく語の深層に入る場合には、それは問題となり得る。しかしそれについては、後述しよう。

この世界像の時代において、至る所で様々な形において、「ますます微小化するもの方向において」(95)「巨人的なもの」(das Riesenhafte)、「巨大なもの」(das Riesige)が現れると、ハイデッガーは述べる。「原子物理学」がその例として挙げられる。実際、「原子」は単なる極微の単体ではなくてそれ自身がマイクロコスモスの構造を有する。ハイデッガーが「原子の破碎」(Zerfall)と形容する技術化が「原子力」という力へ技術化されるるとき、それは一瞬にして一つの都市とそこでの住民を抹殺するだけでなく、核保有国が持つ一発を越える核爆弾の貯蔵量は地球の地軸を歪め得る権能をもち、太陽系というマイクロコスモスの惑星間の関係構造にも影響し得る巨大な力となる。

ハイデッガーの言う「巨大なもの」は、単に量的に巨大というだけでなく、数学的精密さに裏づけられた「体系」として高密度化していく力である。それは常に計算対象でもあり、計算可能であるが、それにも関わらずその全体は、「計算不能のもの」(das Unberechenbare) (95)として立ち現れる。科学技術の巨大な発展がいったいどこまで続き、どこへ向かうか、どこから来たか、等々は、計算不能である。科学者たちが、たまたまその「どこまで、どこから、どこへ」を考えたとしても、その考え自体は科学の「手続き」「実験」「研究所体制」「企業」等の営みそのものには、属さない。ハイデッガーの言う「科学は思考しない」^{※5}は、科学への批判ではなくて、科学の営みの本質形容である。ハイデッガーは、その科学技術の展開とともに

に立ち現れる巨大なものが、「見えざる影／陰」(der unsichtbare Schatten) (95)となつてすべての事物の周りに投げかけられるが、その正体が「我々に知られることを拒絶している」(95)と述べる。

この拒絶 (Verweigerung) について、ハイデッガーは講演の「補遺」(Nachwort)で、それが「有／存在 (Sein) の最高にして最も厳しい顯示」であり、その「隠れた本質」であり、「無」であると述べる (113)。ここが最も肝腎のところなのだが、ハイデッガーはこの論考ではそれは指摘にとどめて、それ以上には立ち入らない。

二 「真理像」の時代

ところでハイデッガーが語る現代技術と、われわれが今日その中に置かれている現代技術とは、局面を異にする。この見解に対して、「ハイデッガーは技術の〈個別形態〉ではなくて〈本質〉を問うているのだから、局面の異なりは二次的だ」という見解も、出されるかもしれない。しかしハイデッガーにおける「本質」(Wesen)は動詞的用法である。局面の展開を含む本質である。現代技術の「今日的な局面」を見ることは、「ハイデッガーの技術論」を考察する場合に必須となる。その考察から、本稿で述べる「真理像」の視座と仏教的な「業」の必然性も、見えてくるであらう。

ハイデッガーの洞察を二十一世紀の技術の諸局面に即して検証しつつ、「世界像」の内部で進行している諸現象を見ていく。ハイデッガーの叙述の結節点を、次の五点に絞ることができ。(i) 巨大化と微細化の回互、(ii) 現代技術の進歩の加速度、(iii) 「情報」の多重化・仮想化・虚無化、(iv) 「真理像の時代」の到来、(v) 「定立」(Stellen)としての技術・技・仕業・定立の権能」

二のー 巨大化と微細化の回互

ハイデッガーが近代／近世の五つの現象の一つとして挙げた「機械技術」(Maschentechnik)は、二十世紀の前半において格段の進歩を遂げたといえ、二十世紀後半は「電子工学」へと主役の座を譲るようになった。機械工学と電子工学の線引きは厳密にはできないが、大体において、前者は乗り物や工作機械、建築構造、熱力学や流体力学、といった領域を舞台とし、後者は最初は真空管に代わる半導体素子(トランジスタ)を素材とし、電磁気の領域でテレビやコンピュータに應用され、その後は情報ネットワークを形成し、種々の自動化とロボット技術の分野となって、今日に至る。航空機や人工衛星などに見られるように、ハイデッガーの時代にはまだ生じていなかった機械工学と電子工学の「統合」が進んだ。その結果、ハイデッガーが指摘した巨大化と微細化の表裏一体の事態は、飛躍的に進行した。ナノメカニクスとして原子レベルでの動きも取り入

れた流体力学を、一例として挙げる事ができる。

これを可能とする電子工学の素材すなわち「電子」は、素粒子の一種として物質の構成要素ではあるが、もはやセンチとかミリとかという単位とは別世界の、極微の粒子である。ハイデッガーはこの巨大なるものと微小化との回互について「原子物理学での数値を考えてみよう」(82)と述べた。たしかに原子物理学で解明される放射線(X線、γ線)やプラズマなどを計測する数値は、センチとかミリとかの世界からは異次元となる。そこで展開される技術領域は、「機械工学」の性質を抜け出て「電子工学」となっていく。そこでは素材の数値を挙げることは数字の上でできても、我々の感覚で感受できる範囲には属さない。一般には聞きなれないNEMS (Nano-Electro-Mechanical Systems、ナノ・エレクトロ・機械のシステム)といった用語が、このことを物語る。ナノチューブ、ナノ粒子、グラフェン(Graphene)。カーボン原子が網目のように六角形に結びついてシート状の素材)といった、いわゆる「ナノ材料」が、主流となる。そこでは機械工学は電子工学となっていく。

この素材領域の「微細化」と反比例して、技術はますます広範囲の領域に及び、ますますグローバルに、ますます巨大化していく。ハイデッガーはこの巨大化の現象傾向は指摘したが、その事態は当然ながら彼の時代には見えてきていない。巨大化の実態をいくつか挙げるなら、次世代通信規格5G (5th Generation)、6G (6th Generation)による衛星インターネット

ト、IoT (Internet of things) によるグローバルな物流網、D
X (Digital Transformation) によるビッグデータの処理、これを
可能にした人工知能AIによる大規模言語モデル (LLM, Large
Language Models)、新資源の開発と宇宙空間での領土の確保を
意図した宇宙開発、等々である。

これらの新技術をさらに加速させる技術として開発されつつ
ある「量子コンピューター」の「量子」は、もはや粒子ではな
い。それは、波動関数によって記述される、離散的な単位の物
理量である。そう言うだけでは一般にはピンとこないであら
うが、例えばレーザー技術が具体例である。「量子コンピュー
ター」では従来のように(0または1)で表わされてきたビット
トが、同時に0と1の両方の状態を取る量子ビットとなる。そ
う言うだけではなおも意味が不明かもしれないが、要するに一
回の操作で一つの状態を順次的または並列的に演算する仕方と、
量子干渉を利用して膨大な量子の組み合わせを同時に計算でき
る可能性との違いであるから、計算能力は桁違いに巨大となる。
なお、ハイデッカーの時代にも量子力学は理論として開拓され
つつあり、彼の講演「思惟とは何か」(Was heißt Denken?) では
ハイゼンベルクの語が引用されたりするが、当時はそれは理論
の領域にとどまって、量子力学の技術化の時代はまだ到来して
いない。その時代が到来した現代では、「巨大化と微細化の回
互」現象は、ハイデッカーの言う「世界像」の内実に、従来の
予測を超えた変容をもたらしつつある。このことを、次に見て

いこう。

二のii 現代技術の進歩の加速度

ハイデッカーは、「研究」という仕方での学すなわち科学が、
「関与する者たちにとつても知られない速度でその上を薦進す
る諸軌道のひとつ」(8) だと言う。科学技術の個別分野で研
究開発に従事する研究者たちも、技術の全体がどういうテンポ
で進歩するかは、知っていない。

もちろん、そのように言えば、技術史の研究者からの反論
が予想される。「ムーアの法則」がありますよと。ゴードン・
ムーアが一九六五年に提唱したその法則は、半導体の集積密度
が一年半か二年で二倍になるという経験則として提唱され、I
T産業全体の進化を象徴する概念として一定の説得性を有して
いた。スマートフォンモデルチェンジの速度や、Intelのプ
ロセッサの進化、一九八〇年代のアナログ通信からここ数年
間の高速データ通信への世代交代、OpenAIやChatGPTなどの
出現、等々はこのムーアの法則をいちおう実証してきた。しか
し経験則はあくまで仮説である。もし現実のある現象がそれに
合わない性質を示したら、その仮説はくつがえる。ゴードン・
ムーアがこれを提唱した時点から、すでに六〇年が経過した。
いま出現しようとしている上述の量子コンピューターや光子コ
ンピューターは、もはや半導体の力学現象からは説明できない
量子現象の原理を、応用する。そのとき、ハイデッカーの言う

「関与する者たちにとつても知られない速度でその上を轟進する諸軌道のひとつ」が、新たに出現する。

技術発展の「速度」は、速度の概念よりは「加速度」の様相を示す。初歩的物理学が語るように、加速度とは、等速運動をする運動体に外部から力が加えられた時に成立する現象である。では技術発展が単なる等速運動でなくて加速度的に進行するのであれば、そこに加わっている「力」とは何だろうか。ハイデッガーはこれについて直接には語っていない。しかし、ハイデッガーがおそらくそう意識しないままにこれを含意する語がある。それは「定立の権能」(Die Macht des Stellens)である。表象定立 (Vorstellung) や制作定立 (Herstellen) と訳した「定立」(Stellens) は、単なる物理的な行為ないし「力」(Kraft) ではなく、「権力」ないし「権能」である。

この話は論考「世界像の時代」には出てこない。しかし、この論考が論集『杣道』(Folwege) に収録されてしばらく後の一九六三年に、この論考を前提とする小島威彦宛てハイデッガー書簡に、頻出する。^{*}一般には無名のこの日本人に宛てた、そしてハイデッガー研究において完全に埋没して顧慮も引用もされないこの五頁の短い書簡で、ハイデッガーは、「表象定立」と「制作定立」との連関で、この「定立の権能」という語を実に二十一回にわたって繰り返し用いている。まるで、この語を「囁んで含めるよう」に小島に聞かせる風である。ハイデッガーはこの「定立の権能」を二十一回にわたって語りな

がら、その権能とは要するに何であるかは語っていない。ただ、「人間は定立の権能によって計算可能な存立物 (Bestand) を制作定立することへと、促され強いられる者である」と述べるだけである。ともあれ、もしこの「権能」が「定立」そのものに内属するのであれば、その相対としての技術の「巨大なもの」が、オートポイエーシス的に発展するときの「加速度」的な発展をすることは、当然の帰結となる。この「定立の権能」が、私見では「業」の性格を帯びるのであるが、それは後述したい。

二のiii 「情報」の多重化・仮想化・虚無化

速度の極限は言うまでもなく、運動の出発地点と到達地点との「同時性」であり、運動体の瞬間移動である。それはいわゆる三次元空間での一般現象では考えられないし、運動体が光速に近い速度で移動している場合であっても、それは観測者自身の位置と運動に関係して、やはり厳密な意味での同時性は成立しない。ところがわれわれの身近な日常において、この同時性がほぼ実現している領域がある。それが「情報通信」である。デジタル通信や光通信での情報伝達は、発信と受信とがほぼ同時である。

近世の「機械工学」が近代の「電子工学」にシフトし、「量子力学」と融合しゆく中で、技術の対象領域の表示は、「モノ」(ドイツ語での Ding、英語での thing) から「情報」

(Information) に転移した。ここでは「モノ」もまた「情報化」される。例えば先にも挙げた「IoT」(モノのインターネット)がそうである。ここでは「モノ」は、単なる物質的単体として時空に存在するだけでなく、センサー、通信モジュール、データ処理ユニット、スマート農業、等々の分野でインターネットに結合されるものとなり、流動化されていく。ここでは「モノ体系」は「コンピュータシステム」、「金融システム」、「物流システム」等々として、実体性を脱ぎ捨てて「情報システム」の一環となっていく。

ハイデッガーの時代にはまだ情報化社会は出現していないから、「情報」という用語は論考「世界像の時代」でも登場しない。しかし「情報」をも「世界像」の様態として捉えるなら、世界像は自らを映す「原像」(Urbild)と、映された「写像」(Abbild)との、ないし「映す」(abbilden)働きと「自己写像」(sich abbilden)の働きとの「同時的生起」として捉えることが可能となる。ハイデッガーはかつて「世界が像なるところでは、体系が、思考においてだけでなしに、支配をする。」(93)と述べた。たしかにいま種々の技術システムないし「体系」は、思考においてだけでなく情報社会において、ほぼ瞬間移動の情報伝達の「同時性」を、達成している。問題は、その結果としてどういう事態が出現しているかである。

まず視座に入れておきたいのは、近世初頭から始まった「機械工学」が、二十世紀後半からの「電子工学」へとソフトし、

両者が融合していったとき、それに応じて「システム」という鍵語が「情報」という鍵語にソフトしていったということである。その動きの最先端は、「人工知能(AI)」である。AIは、生物学的なニューロンを模倣して人工ニューロンをつくることで可能となり、人間の脳の情報伝達組織、すなわち神経回路を、模倣する。しかし単なる模倣といったものではない。そこで出現する「ニューラルネットワーク」は、すでに広く見聞されるように、人間の認識がなすよりはるかに高速かつ大量の情報伝達と情報処理を行ない、画像認識、自然言語認識、運動神経、等々をパターン化し、その諸パターンを瞬時に総合していく。現在のところその働きは、すでに存在する既存の膨大なデータの集積と高速処理だから、独創的な発想とか意志ないし意識を持つとかということはない。とはいえ、半世紀以上も前の一九六八年に作成された映画『2001年宇宙の旅』で、人工知能HAL9000が意識を所有して人間に反乱するといったストーリーは、もはや単に空想のストーリーとは言えない。自動的に起動するAIプログラムは現在でも既に作られているが、その延長上に、自己判断の範囲を遙かに拡大した自律的なAIが想定され得る。

ここで「世界像」の内部での、ハイデッガーがおそらく想定していなかった出来事が進行してきている。すなわち、情報化における「巨大化」と「微細化」の相互の結果、世界像が多重化し仮想化している、ということである。「像」(Bild)その

ものが、もともと「実物」でないという意味での仮想性を帯びている。それがエレクトロニクス技術によって情報網というグローバルなネットワークとなると、「実物」のデータ像が実物の「外部」で形成 (outside) され、厳密な意味における「想像の像」(Imbildung) として、実物に取って代わられる。

ある優れた精神科医の友人の話を聞いたことだが、ないしその話を少し敷衍するならば、次のような治療状況を描くことができる。従来の実存的な精神医学では、「患者」に直接に接して対人関係の中で治療がなされてきた。しかし今日の別の主流は、「患者のデータ」のアルゴリズムに焦点を当て、その分析から適切な薬を処方し、その場合、「大規模言語モデル」(Large Language Model) の技術がますます権能を發揮する。この技術はすでに OpenAI や ChatGPT (Chat Generative Pre-trained Transformer) Google BERT (Bidirectional Encoder Representations from Transformers) や Google PaLM (Pathways Language Model) などに応用されているが、これが患者の症状診断や処方という現場で応用されると、「患者」の心の状態は「データ」として、これらの大規模言語モデルのパターン化の助けを借りて診断される。病状改善はますます確実となっていく。ただ、データを供与する患者も、データを処理する治療者も、かつてのように直接に直面して人格的に接し合うのではなくて、外在化されたデータの付き合い合わせという仕方、間接に接し合うから、患者のみならず、治療者も、その人格的内容がデータの世界に移さ

れて、空っぽの存在となっていく。

この空っぽ状態を、ハイデッガーが世界像の「影／陰」ないし「無」と名づけた事態の、一つの具体的現象と見ることもできるだろう。それは人間存在にとつては何を意味するのか。この問いを念頭におきながら、考察を進めよう。

二のⅣ 「真理像」の時代の到来

「世界像」というときの「像」は、「情報システム」として巨大な力をもっている。すでに述べたことを反復するならば、5Gや6G、衛星インターネット等による通信技術、IoT (Internet of things) によるモノの情報化、AIによる遠隔医療、太陽光発電や宇宙開発に要する情報の網を世界的規模で御しているGAF A (グーグル、アップル、フェイスブック、アマゾン) 等々は、世界像が「情報像」として発展し、形成されていくことの具体例である。

この情報網の体系化と巨大化は、ハイデッガーも一九五二年の講演「技術への問い」で、「情報の体系」として眼差しに入っていた。情報の細分化と個人化とが、この「体系」の内部で進行する。他方で「情報」というものが備える高速性、同時性、映現性は、いまGAF Aの占有体制を抜け出て、SNSのような「個人的」発信主体の集合へと拡散することを可能にしている。SNSといっても現在の日本だけで十種を超えるものが流通して、それぞれに機能を異にするが、共通するのは発信主体

が個々人だということである。そこでは個々人の身体的・空間的な接触を仮想空間に移し、その仮想空間が高速で拡散される。その結果、たとえばそれは、予測不能の「世論」潮流となつて、国政の「選挙」を左右する「力」となる場合すらある。たとえば強力な独裁政権が出現してこの世論を権力的にコントロールする場合でも、そのコントロールそれ自身が「情報操作」を基軸とする。そうであれば、情報像はその本質からして、「実像」か「虚像」か、という二項図式を根底から崩し、仮想性を帯びるものとなる。そのことは、通常は「唯一的な事実性」という意味での「真理」が、多重化し仮想化し行くということである。ハイデッガーは一九五三年の講演で「定立の権能」のいわば全体機構でもある「組み立てー機構」(Gestell)を語り、「組み立てー機構は真理の現われ (Scheitern) と統御 (Walten) を歪める」と語った。彼が看取した真理の「現われと統御の歪み」は、要するに真理が「仮想の像」になるということである。そのような仮想像を本質とする「真理像」は、固定的な実体を持たない。「それが真理か」という問いそのものを、掘り崩す。「世界像の時代」はますます仮想性を帯び、多重化し、「真理像の時代」へと変容しつつある。世界像が別の像になるというのではない。世界像の具象化が「真理像」という生起になる、ということである。

ここでもう一つ、現代科学の側から指摘なされることが予想される。すなわち科学の営みは真偽を問う得ないような「真理

像」の曖昧な世界ではなくて、因果関係の精密な究明と計算とから成り立っている、たとえば二十世紀後半からの「生命科学」を見よと。生命科学は遺伝子配列やタンパク質構造を研究し、「バイオ・インフォマティクス」と呼ばれる情報工学として厳密な計算可能性の分野である。たとえば医療において患者のデータの管理や診断支援をおこなうシステムが構築されるとき、大衆が発信する曖昧なSNSの世界ではなくて、事実に即した正確な情報の集積と処理がなされる、云々と。まさにその通りである。ただし、一つの問いが生じる。すなわち、ビッグデータに映し出され再現された確実で精密な「生命現象」は、まさしくそれゆえに、精密性を具えた、「仮想的生命像」ではないのかと。「仮想的」(ヴァーチャル)とは、もともとラテン語の "vires" すなわち「優れた在り方」を、含意している。バイオ・インフォマティクスから得られたデータは、優れた仮想的な生命像であるがゆえに、それは、直接に生けられる事実的な「この」生でないのではないかと。もし後者がアバターとして本人の私に成り代わるなら、私自身は「空っぽ」になり始めばしないかと。

ハイデッガーは一九二七年の『有／存在と時』のあと、一九二九年に草した考察「真理の本質について」で、「現実の困窮に直面しているところでは、真理への本質への問いという、すべての現実的なものを度外視した問いは、いったい何のためになるのか」という一般的な疑問にも言及した。そして有／

存在の問いに立ち戻ってなされる「真理への問い」へと、思索を掘り下げた。それは西洋形而上学の由来と本質を問う思索の途上での重要な一歩だった。ただ、そこでは「現実の困窮」というレベルと「有／存在への問い」というレベルを峻別しすぎるさらいがあった。そのことが、一九五三年の講演「技術への問い」では大きく是正されている。

二〇〇「定立」(Stellen) — 技(わざ) — 仕業(しわざ) — 業(わざ)

ここで、ハイデッガーが現代技術を「形而上学的根拠」に向けて思索したということの裏面とも言うべき一つの問題点を、指摘したい。すなわち「巨大なるもの」の支配の結果として航空機やラジオなどで、「辺境の諸世界」(abgelegene Welten)の遠さが消滅する(83)、と云うくだけである。複数形で記される「辺境の諸世界」は、テキストでは重要な連関で語られることはない。そこで意味される「世界」は、世界像というときの「世界」と意味次元を異にした、平凡な意味合いである。しかしまた、一考を要するものを含んでいる。すなわちその辺境の諸世界は、産業化と近代化に成功した西洋世界から見ての辺境である。その表現には、前期のハイデッガーの思索の中に忍び込む、しかし彼本来の思索とは相容れない、西洋中心主義の感覚の残滓が見られる。ハイデッガーは近代／近世の「キリスト教化」を語り、西洋形而上学の世界とキリスト教世界の重なり

を見たが、そしてそれ自体は明らかな歴史的事実であるが、今日の世界状況から見れば、イスラム世界やヒンズー教、仏教等々の「諸世界」は、もはや「辺境」の位置にはない。科学技術の現状という観点からだけでなく、西洋形而上学とは別の根本経験をそこに蔵している、という意味もそこに加わる。そしてハイデッガー自身がやがて、東アジア世界に向ける関心をいろいろのテキストで漏らすようになる。その一つを挙げておこう。それはハイデッガーの「世界像の時代」考察を収録した論集『杣道』が刊行される一年前の一九六八年に、辻村公一がハイデッガーの小論「思索の事柄を規定することへの問い」を邦訳した時に、この邦訳に寄せた一文の一節である。

「空け開け (Öffnung) の思索を通して、またその十分な特色づけを通して、我々は、おそらく、次のことが可能となるような領域に辿り着く。すなわち変貌した西洋的思惟を、東アジアの(思惟)との実りある対峙へもたらしことである。その対峙は、人間的現有／人間的現存在を極度に技術的に「計算一化 (Be-Rechnen) すること、仕組むこと (Manipulieren) との脅威から人間本質を救済する取り組みの、一助になるかもしれない。」

本稿の考察は、西洋形而上学を中心軸とする近代世界からは「辺境」と見なされた東アジアの根本経験、とりわけそこで伝承される「業」(わざ)の思想を、ハイデッガーの思索そのものが辿りつくひとつの可能性領域として、取り上げる。

仏教教典の鬱蒼たる森の中に入る仕事は、その方面の人たちに委ねたい。本稿としては、ハイデッガーが示した現代技術の「影／陰」という事柄に関係する限りに於いて、仏教で言う「業」の思想を念頭におくことにする。

ハイデッガーが「東アジアの（思惟）」に寄せた注目は、「今日の我々には知ることが拒まれていたもの」(88)としての「無」(103)のゆえだとみて良いであろう。東アジアの思惟は、特に仏教思想に見られるように、「無」の思惟である。ハイデッガー自身は講演テキストではこの「無」を、「有／存在それ自体であり、その真理に人間が委ね渡されているもの」(104)と名づけた。彼が「無」について語るときにいつもそうであるように、ここにも、思索がたどりつく最終の場所がなお思索にとつて未決着の何かを残しているという困惑の気配が感じられる。

まずはハイデッガーが上述したように強調した「Stellen」という事柄が、改めて浮上する。この語は本稿ではいちおう「定立」と訳したが、先述のようにこの語はドイツ語ではごく自然に Vorstellen, Herstellen, Bestellen, Nachstellen, Gestellen, Gestell, 等々と連関し、その語義連関は英語でもフランス語でも訳出できない。それは哲学史の重要なテキストをひもとくときにしばしば生じる問題でもある。我々が「Stellen」という語だけを取り上げて、訳語を定めて先へ進むとき、それはドイツ語の中に自分を移し置くかざりのことであつて、自分の（日本語の）言

業でほぐしたわけではない。^{*12}

いま、この問題を「Stellen」という語の語義連関の全体を念頭に置いて小考する時、それは人間が何かを表象し実行する場合の「行ない」、「技（わざ）」、「仕業（しわざ）」、等々である。動詞としては「為す」、「する」、「置く」、「立てる」といった平易かつ基本的な行為の語が浮上する。そうであればこれらは、「東アジアの思惟」という視座に立つとき、「業」(ごう)という仏教語の事柄連関に、思いを至らせる。「業」とは、行為者の行為がこれに先立つ行為の「因」を受けたものであり、その「果」が次の行為の「因」となり、その循環回帰の連関は、行為者自身もその全体をなす世界大の作用連関を知り得ない。しかもなお行為者は、自分がこの循環回帰の作用連関の中に投げ入れられている事実を実感する。その実感は、ハイデッガーの言う「ザインの問い」とか「形而上学の命運」とかといった事柄からは遠い連関ではあるが、しかもなお彼の言う「世界のー内にー有ること」の「根本気分」と通底するであろう。ハイデッガーが、「有／存在の隠れた本質が、拒絶が、端的に有るものではないものとして、無として、露呈する。」(104)というときの事態は、「業」の「無明」すなわち「無知の暗さ」と別物ではないように思われる。

ただし、イメージ的類縁性だけで「Stellen」と「業」とを重ねることは、なおも連想ゲームの域を出ない。両者の構造そのものに根ざした類縁性が、なければならぬ。ハイデッガーの

技術洞察は、まさにこの点で重要な示唆を提供している。すなわち「有るもの」(Sachos)[※]の主體的基体としての人間が、「自分が対象的なものとしての有るものに関わる仕方を、自分自身に対して採る」(ge)という「自業自得」の構造である。有るもの全体を極度に技術的に計算一化(Berechnend)することが、自分自身をも技術的に計算一化することへ跳ね返ってくる構造である。「真理像の時代」には、「自己」と「他者」と「モノ」がすべて計算一化され、外在化され、当の「自己」「他者」「モノ」はそれ自体としては空虚化しゆく。ちなみにそれは、萌芽的にはギリシア古代に始まっていたことを、ハイデッガーは見ている。ギリシア世界において「有るものは人間が主観的知覚という仕方では表象定立することによって有るものになるのではない。むしろ人間が有るものから観られた者なのである」(83)。ギリシア的な有るものから観られた者なのである「跳ね返る。その循環構造はまたしても「業」の構造と同じである。

ハイデッガーはこの事態の根本に、西洋形而上学の根本動向を見た。それは「Sachosの権能」の動向でもある。その権能によって現出する巨大なもの影／陰にして無が、我々に知られることを拒絶していると、彼は言う。しかし「業」の思想であれば、それと表裏する「空」の根本経験が、立ち現れる。「影／陰にして無」という事態は変わらないとしても、その意味が一変し、「空」の経験が開かれ得る。

詳細は別の機会に譲るとして、今はごく簡単な締めくくりを試みたい。真理像の仮想化と空虚化の一例として、人間の存在ないし実存がデータとして外在化せられ、それ自身は空虚になつていくという、精神科の治療の現場を先に挙げたが、いままそこには単にネガティブな意味で空虚化するということのほかに、「空」のリアライズという別の可能性も見えてくる。すなわち、単にデータを追ってこれに追従するだけの存在でなくて、データそのものを自己となし、これを自在に使い得る存在にもなり得る、という可能性である。趙州という中国の禅匠が言った「汝被十二時使。老僧使得十二時」(汝は十二時に使われるが、老僧は十二時を使い得たり)という語を、想起したい。ただし、フェイクニュースの飛び交う「真理像の時代」に具体的な生活場面で「十二時を使い得る」とは、何を意味するかが、問いとなるだろう。この問いとの関連で、もう一つの語を思索の指標として挙げておきたい。

空闊透天、鳥飛如鳥(空闊クシテ天ニ透リ、鳥飛ンデ鳥ノ如シ)。

「鳥飛んで」というときの「鳥」は、客観的事実として見られた単体としての鳥である。(複数でも群れでも構わない。)しかしその鳥が、単に客体として見られている単体あるいは群れに止まらず、闊く透明な天空(ないし空)の現成としての鳥(道元が「現成公案」と名づけた事象)だと気づくとき、それは「鳥のごとし」となる。般若思想の「即非」の論理(世界は世界に

非ず、故に世界と名づく」の定式を借りて言えば、「鳥は鳥に非ず、故に鳥と名づく」となる。「真理像の時代」において、「鳥飛んで鳥のごとし」は、「定立 (Stellen) の権能」による仮想現実の像としては、真とも偽とも言えない不確定性の闇である。しかし一旦そうと分かれば、その仮想現実そのものを「仮想現実のごとし」として、「仮」として見る立場が開かれ得る。門は「門のごとし」となり、「輝ける闇」となり得る。そこでの仮想性は「空」の経験の開けとなるはずである。それは「真理像」の「像」性格を肯定して、そのデータの中を自在に動くべきである。

【注記】

本稿は「ハイデッガー研究」というカテゴリには属さないであろうが、敢えてそのカテゴリの視座に立つて付記するならば、ハイデッガーが「世界像の時代」を語るときの「世界」はハイデッガーが『有と時』(『存在と時間』, „Sein und Zeit“)で「世界のー内にー有ること」(In der Weltsein)を語ったときの「世界」とは、異なっている。また『芸術作品の根源』(„Der Ursprung des Kunstwerkes“)で「世界と大地」を語った時の「世界」とも同じではない。本稿では金剛般若経の「世界」をも念頭においている。

また同様に、本稿で「真理像」を語る時の「真理」の意味も、ハイデッガーのコンテキストでは実は問題化する。ハイデッ

ガーが『有と時』(『存在と時間』)で「真理」と「非真理」を、そして論考「真理の本質について」等々で「真理」を語る時、その語はギリシア語の *alētheia* に遡り、事柄が顕わに露呈するときの不覆蔵性 (Unverborgenheit) ないし空け開け (Öffnung) といった事象である。その「真理」が「像」(Bild) になるという事態は、ハイデッガーの視座では簡単には言えない。しかし本当にハイデッガーの意に即して言えないのか。これも問いとして注記しておきたい。

注

1 Martin Heidegger „Die Zeit des Weltbildes“ は、最初に「形而上学による近世の世界像の根拠づけ」と題して一九三八年にフライブルクで講演され、一九五七年に『拙道』(Holzwege, Frankfurt a. M., 1957) に収録され、『ハイデッガー全集』第五卷 (Martin Heidegger Gesamtausgabe, Bd. 5, Holzwege, 1977) に、講演当時すでに草やれていた重要な「補遺」(Zusätze) とともに、改めて収録された。以下の引用に際しては、この『ハイデッガー全集』(以下HGAと略記)版からのページ数を挙げる。その他のハイデッガー・テキストからの引用に際しては、その都度に出典を明記する。

2 ハイデッガーが一九四〇年代から六〇年代にかけて発表した技術論の主なものを、関口浩が精選して和訳し、簡明で適切な解説を付した。(マルティン・ハイデッガー『技術への問い』, 平凡社, 二〇〇九年)。推奨に値する好著である。

3 ここでは「遠さ」と「近さ」を括弧で括ったのは、筆者自身の用語

の意味を込めたからである。拙著『共生のバトス——コンパシオン（悲）の現象学』（二〇一八年）第一章で、他者関係においては「遠く」と「近く」が「遠近とほぢかく」として同一事態であることを述べた。

4 この「巨大なもの」とか「計算不能のもの」とかは、後年の講演「Die Frage nach der Technik」（一九五三年）で言われる「途方もなく大い」(Das Ungelheure) へ、ほぼ同じものと見て良かったろう (vgl. HGA, Bd. 7, *Vorträge und Aufsätze*, 2000, S. 16)。ちなみにその講演でライン河の水力発電の例が取り上げられることなどから、ハイテッガーの「現代技術」の認識を唾う笑う論評もあるが、その批評の浅薄さは敢えて指摘するまでもないだろう。なお、ハイテッガーのこの講演は、„Stellen“の総体を „Ge-stell“ と捉える考察のほか、「東アジアとの対話」の必須性にも触れる重要なものであるが、本稿では一九三八年の講演「Die Zeit des Weltbildes」を焦点とした。総じて *Vorträge und Aufsätze* (HGA, Bd. 7) に収録された一九五〇年代の講演類は、「世界像の時代」という決定的な洞察を提示した一九三八年の講演の、いわば「補充」にすぎたものと、私は理解している。

5 Heidegger, *Was heißt Denken?*, (1952), jetzt in: HGA Bd. 7, *Vorträge und Aufsätze*, 2000, S. 133

6 Martin Heidegger - Takehiko Kojima, Ein Briefwechsel (1963-1965), in: *Japan und Heidegger*, hrsg. im Auftrag der Stadt Meßkirch von Hartmut Buchner, Sigmaringen 1989, S. 216-227. 総評の巻頭 S. 222-226.

7 同前 S. 225.

8 Heidegger, *Die Frage nach der Technik* (1953), *ibid.*, S. 24.

9 *ibid.*, S. 29.

10 Heidegger, *Vom Wesen der Wahrheit*, in: *Wegmarken*, HGA, Bd. 9, S.

177.

11 *Japan und Heidegger*, *ibid.*, S. 230. 訳は筆者による。

12 この問題は、ハイテッガーの読解の場合には根本の問の事柄である「ザイン」(Sein, Seyn)の訳語(有、存在)においても、問題として伏在している。これについては、かつて「(有)ないし(存在)」という小論で試論した。

13 ハイテッガーが „Sein“ との区別で用いる „Seiendes“ という語は、普通のドイツ語辞書にも載らない用語であり、他の欧米言語でも訳すと人工的になる。日本語では「存在者」という訳語が定着しているから、それでも良いのだが、敢えて言うなら、「者」は人間に対して用いるのであって、「もの」には用いない。「存在物」とするほうが意味の上では原語に近いが、ついつつして馴染まない。そこで「有るもの」という訳語を用いることにする。

14 道元『正法眼蔵』第十一「坐禅蔵」の語。「空闊クシテ透リ、鳥飛ンテ鳥ノ如キシ」を参照。この語のさらに立ち入った意味は別個に説明を要するが、本稿では締めくくりの語とする。

編集後記

今号の刊行も又、関係各位による御高配の賜に他なりません。鈴木大拙師の思想と為人を巡って御話し下さいました岡村・水野両先生（本対談から三年を経た令和五年、岡村先生は逝去なさいました、ここに謹んで弔意を表します）、特集「人と人との間——宗教と精神医学」に御高論を懇切にも御寄せ下さいました先生方、そして御多用にも拘らず、令和五年度の弊所公開シンポジウム「宇宙科学の世界像と仏教的世界観」における御高話を基に玉稿を御寄せ下さいました佐藤・佐々木両先生を始め、執筆者各位の御惠稿に対しまして万謝申し上げます。つらつら惟るに、この原稿の授受として「人と人との間」の一つ、多事の合間を縫ってなされる御執筆を締切に間に合わせて頂く為には、寄稿者各位とは適切な間合いを取る。ことが肝要です。原稿督促の極意は付かず離れず、間無しも間違い、間延びも間抜け。それと言うは易く行うは難し。「間は魔物」なり。（安部）

日独文化研究所 年報

文明と哲学 第一七号

二〇二五年三月三十一日発行

定価（本体二〇〇円＋税）

編集委員会（50音順）

秋宮克哉（本研究所理事、理事長）

安部 浩（編集代表、本研究所理事）

大橋良介（本研究所理事、所長）

高田 篤（本研究所理事）

林 英哉（本研究所理事）

和田 信（本研究所理事）

発行

公益財団法人日独文化研究所

郵便番号六〇六一八二〇五

京都市左京区吉田河原町九一三

電話 〇七五―七七一五〇〇

FAX 〇七五―七七一五〇四

<http://www.nichidokuhonka.or.jp>

発売

株式会社現代思潮新社

郵便番号一七〇〇〇〇一

東京都豊島区果嶋二―一―八〇六

電話 〇三五九八―九三三四

FAX 〇三五九八―九三三五

<http://www.gendashincho.co.jp/>

ISBN978-4-329-10027-6

©opnsch-Deutsches Kulturinstitut 2025

著―本―世―本―世―本―世―本―世―本―世